



中村俊定文庫
文庫 18
154



る字に

ねもあふよかあつらつたさるを
わらわのあつらつたさるを
えあつらつたさるを
しつらつたさるを

中村俊定



とたきしあひつた尻を衣使 蘭舟
汗をわらわのあつらつたさるを
強のさるあつらつたさるを
祇の代にうらつたさるを
とらつたさるを
田の埃もさるあつらつたさるを

初うもはや七ニ僧ニて中ニせり
程ニのゆゑ暗ニなるは
つらニく積ニる向ニの足ニ地ニ
禍ニのひらニもやニもニ鴛ニ鴦ニ
傾ニ城ニ金ニてニやニよニてニあニはニはニ
胡ニとニあニまニにニ樂ニなニはニ法ニ神ニ
笛 舟 笛 舟 笛 舟 笛

木ニ松ニのニひニらニりニでもニ草ニまニさニすニ
月ニよニ死ニめニぬニしニ第ニれニ本ニをニ
隨ニ雇ニしニ殺ニ一ニ反ニをニあニげニよニてニ
令ニ系ニまニらニあニまニらニちニあニらニ風ニ呂ニ歌ニ
石ニ塔ニよニ同ニ一ニ名ニもニあニるニ花ニのニ法ニ
片ニやニよニあニまニをニはニきニてニ音ニをニ拍ニ
笛 舟 笛 舟 笛 舟 笛

名

如月乃機を跡生織て三全
 絳くけりてをぬれ徳合う 舟
 琴の音のあけあけあくもせ 笛
 仰山をぬれ舟の音あきき 舟
 雨虹を志らみかろく竹の上 笛
 暁絳乃中に 對類 舟

物さす縁の音のねりう 笛
 扇もあきてつんり東小 舟
 は環女中の髪は目のつて 笛
 けられけりてあきよこそ 舟
 虫の音よ木槿の坊を起さや 笛
 月よむくへし月やそてひいや 舟

う
はぶ本のたうものぬ珠の末 笛
位牌も川ふき大坂の年 舟
酒桶乃中てとらひしと也 全
もてそくさいふ二枚麻風や 笛
花の喜聖、笈の帯又せそ 全
いづれよつちと日い承ふたる 舟

四季、發句

正月や白兎シロウのかおれよ 野中 活水

旋頭句

十萬堂よ

海

おりろれお喜や小き名たる 百丸
獅子舞もお根をまつまのわげ 馬櫻
鉢のよ乃お根の樂ツグこそ 田角 鷺助
なれ

いっのちりあの前白いむらあつそ 支考
玉子の糍あれり何そこの道成ち 春堂

は某のおかきまありて

大坂

宥整つて花屋迄の柳の風 珉子

朱洛雁

行尸を村や鏝ヤシリよ錢の音 沖見

より垣の柱もしり桃のそし 芦笛
あつそし物瓶の竹や桃のふ 蘭舟
梅の香みてもよくあつて箱茶師 隆助
心持していともよく 郭の 青人
青梅も垣よ訓家や郭の 芦笛
出立焼く二つんの鳴きや陳子色 千及

祀借の人教よもれる此
石の如く思ふおかし
芦笛より發するを
りともよきつこし

淋 カケル 祀借 其乃月 億磨
猪早 大笑ひ出 けりて 瓢箪 馬橋
天の河橋よもたし けりて 人角
森の戸やおぼえ 仕色よ 女 器具 春堂

橋よ けりて けりて けりて けりて
連の言の飛つ 時物おかつ けりて
唇の紅粉の 曇りや 萩の花 芦笛
大靴め けりて けりて けりて けりて
目二つて あら けりて けりて けりて
楠時代 けりて けりて けりて けりて

截キレともよ大母屋オモの紙シ成セ 濁水
盤イタかみ壁カキももすやみ新ニ 沖見
世ヨいまあなキれ勝カチももまの南舟
香カ酒サケや右ミ袋フクロのわよ酒の抄シヨウ 芦笛
り聞キこふあハこ知チおの雁ガシ 百丸
首カビ季キはや終ハり踊マ止トの半ナ 蟻道

秋真

馬櫻

桃栗之年柿八重娘ハチ半ナと
や私シもあては秋の意イ月ツキ 芦笛
雨の月ツキもあもあ玉足袋タマよ百丸
は世の半ナを問トい入イるといト 踏助

私ハ牛海流して身を以てんあれ
首も志らして双抱さんまの
雷をなのおよたんのませよ
先も町へ光りし形丸
又ぞいかまをぬ氷で持て来り
送よまの路に佛雨ノ格
笛 櫻 丸 助 櫻 笛

雪う新瑞よ木鳴をききけし
花の下よそ急よは祈 助
地頭よと籠後せいと夕夜 笛
仍よ小夜よとあめ人冬 櫻
思やも尾昔へい舞きりよ 助
娘官のけに懐はす賀来 丸

あらしのりさしく 権子の底ぬけ楳
其ころろなき 女房よちも 笛
嗚呼箱根文をかくも 泗濱石丸
銀をねて踏あす 助
しほり幸は度ふ 弁之入 観て 笛
寺の縁起よもあ の 楳

うねくと秋のかげ屋 平十郎 助

新宅可成戀 丸

案へて志くく 眠り侍り
くくは 眺もあめその
夕つるく付白雲す
けりあさるたれそ 再作よ及

多中
密通の後、娘れい茶毗 楳

夢中

生れのむさき乃父ろろたつ 笛

不寐

居凡呂れ小僧ゆつあまり 丸

夢中長哥貧家子あり餅髪をん

すを母の親んよけり踏つて

こころいといやといり鉄一文

やりて踏つてやりすてよあ

髪踏んとて付思ひ白一文て

ひよい髪いよせめし 助

文字ニ字ニ付ニ付ニ

粟豆の交し乾く蓮の飯 笛

金入一川 截の大將 櫻

は雨く東花坊入来三三白

雨をス三三よまき者よの

食つふあてふて玉倒

茶漬喰て黒鞆の鐘をて 支考

かすか峰の枝の曙 全

上^ニで放て糸車又小便汲せり 助
登^リてい居^リてけし甚^ク蓋^スす 丸
名^ヲあ^リや^らよ^ハ身^ハハ^ク盛^ルの櫻^ヤ櫻
真^ニ鍬^ノ作^リの月^ハ鈕^トれ 笛
庭^カろ^クさ^アと^ウー^ヤる^夜の^丸
和^当と一番^ハひ^祢ろ^クと^事助

葉も特^ニ賣^ルの座^ニて^ハ七^々湯^ノ 笛
人^ハた^ゞと^ゞそれ^ハ身^ハ酸^ク 梅
腰^ハお^れ解^ルぬ^ハ我^ハ綿^ハせ^リ 助
月^ハよ^クと^クや^らぬ^ハ歌^ハ海^ハ外^ノ 丸
花^ハよ^クう^ハの^ハ園^ハ子^ハと^クも^ハ云^ハ庭^ノ 支^考
あ^ハめ^ハり^ハぬ^ハ其^ハの^ハ三^ハも^ハさ^ハや^ハ笛

追加 才唐東武より

ふ通の

露沾

河原やほろ^様緒の枕の色

冠里

山吹やまの子入にさゆ

露江

正面の梅の香なる麦二寸

宜藤

川原いよる春とも砦のや

辨外

雨云れどく懺悔する後河原

信笈陽城化城の中 閑幽

戸田河やいづれ秋風やうら秋

そのとわれ之浦万日郭云 其角
百姓の茶れ濃うらや桃の露 沾徳
名月や煙遠くあさあの上嵐雪

江都風物々々 秋意花
あられあふ清き中
ら風きりりくく
殺匂はさつひきけし

け君のまゆて生らふくさ
僧 錦糸鳥り

卯のふよ豆府ますす 清水寺

遊合城北

麦の穂の筆を添く 門外

敷居の中を未練

うよ

み

丁度

芦笛又

寶永二し酉歳八月中旬

京
舟筒丸左兼板

あやのいせのむすめ

歌子

昭和十二年四月二十一日

後室



